

三 郎 山 乙 （ あ と が き ）

◆95年の秋、北京市人民对外友好協会の招待を受け、京極興一学長先生・松田幸子先生とともに北京市を訪問した。懐かしい笑顔に迎えられて、楽しい一時を過ごした。十年ひと昔、中国にいる「同窓生」も20人を数える。本学の留学生受け入れも、過去を振り返り、更なる飛躍を求めて未来を志向する時期を迎えたと言える。日中国交回復25周年という記念すべき年に、中国関連特別企画の本論集を発刊できることを喜びたい。

◆「10周年記念文集」には、お忙しい中、京極学長先生・松田先生・宮沢理事より玉稿をお寄せいただいた。本学の留学生受け入れの概要が示された後に、これまでの留学生受け入れの歴史について、関連の主な記録を収録してみた。さらに4人の「同窓生」が近況をエッセイのかたちで報告してくれた。今年度留学生2名の論文紹介とあわせて、本学の留学生の過去・現在・未来に関する材料をひとまとめにした積もりである。掉尾を飾る文献目録は、96年度後期科目「日本語教育Ⅱ」出席者全員の手によって作成した。司書資格取得を目指す学生諸君が大半を占めているので、いわばレファレンス業務の実習を兼ねたものとなった。ビギナーゆえの誤脱も、予想される。使い込みながら補訂を重ね、目録として成長させていきたい。

◆学生の論文は、丸山久美子さんの1点のみだが、日本語教育の分野で緊急の課題として注目されている、外国籍の（もしくは日本語を母語としない）児童・生徒にスポットを当てた力作。後に続こうとする諸君は、本稿の成果を踏まえ、学生の立場でできる、あるいは学生の立場だからこそできる研究調査・学習支援の方法について、さらに考察を深めてほしい。

◆今回の講演採録論文には、多彩に3氏のものを収めることができた。宮坂ゆかり氏・柳浦恭氏には、それぞれの懇話会当日のお話の様子が彷彿する、親しみやすいまとめをしていただいた。難しい事がらをやさしく語るのは、困難を伴うもので、たいへんな力量がいる。中山益雄先生は、テープ起こしをした原稿に、特別に手を入れてくださった。ソフトな語り口の中に、教職を目指す諸君への励ましを込めていただいた。

◆「日本語教育」「国語教育」、我々の興味関心は、ともに言葉の教育をめぐるものを中心となっている。次号では、それぞれの立場で教壇に立っている卒業生の声を聞きながら、考えるヒントを集めてみたい。

（大橋敦夫）